

芸術文化創造センター整備推進委員会建設計画専門分科会 第4回 議事録

日 時：平成26年1月24日（金）18時30分～21時30分

場 所：小田原市民会館5階第3会議室

出席者（敬称略）

[芸術文化創造センター整備推進委員会 建設計画専門分科会]

	氏 名	区分・専門分野	所属等
会長	仙田 満	建築学 環境デザイン	東京工業大学名誉教授 (株)環境デザイン研究所所長
副会長	勝又 英明	建築計画	東京都市大学教授／建築学
委員	桧森 隆一	文化政策 アートマネジメント	嘉悦大学副学長／地域産業文化研究所所長
委員	市来邦比古	舞台設備	日本舞台音響家協会副理事長
委員	三ツ山一志	劇場運営 展示系	横浜市民ギャラリーあざみ野館長 横浜市芸術文化振興財団

※仙田分科会長は所用により欠席。

[事務局・設計者]

所属・役職		氏 名
事務局	文化部長	諸星 正美
事務局	文化部副部長	原田 泰隆
事務局	文化部管理監	瀬戸 伸仁
事務局	文化政策課長	中津川 英二
事務局	芸術文化担当課長	間瀬 勝一
事務局	文化部文化政策課芸術文化創造センター担当副課長	志村 康次
事務局	文化部文化政策課芸術文化創造係長	高瀬 聖
事務局	文化部文化政策課芸術文化創造センター整備係	杉山 和人
事務局	文化部文化政策課芸術文化創造センター整備係	府川 幸司
事務局	文化部文化政策課芸術文化創造センター整備係	鶴井 雅也
設計者	(株)新居千秋都市建築設計	新居 千秋
設計者	(株)新居千秋都市建築設計	吉崎 良一
設計者	(株)新居千秋都市建築設計	亀田 浩平
事務局	(有)空間創造研究所	田原 奈穂子
事務局	(有)空間創造研究所	瓜生 陽

[傍聴者]

38名

～次第～

1. 開会

2. 議題

(1)パブリックコメントの意見について

(2)その他

3. 閉会

次第1 開会

・文化部長挨拶

事務局

(資料確認)

本日は仙田分科会長がお休みのため、委員長代理として勝又委員に進行をお願いする。

勝又副分科会長

では、私が代わりに議事を進行させていただく。本日は昨年11月21日にパブリックコメント案として発表された第3回基本設計案について、市民の皆さんから寄せられた意見を受けて議論していただくことになる。建設検討専門分科会としては最後の会議になる。限られた時間ではあるが、中身の濃い議論をしていきたい。

また、ある分野に議論が集中して話が先に進まないということにはしたくない。今日は、ひとつおりの項目について、議論できるように進めたいと思っている。また、のちほど、桧森委員が中心となってまとめられている管理運営実施計画についても、その経過や状況をご説明いただければ幸いである。

前回の分科会から時間が空いていることもあり、これまでの経過や管理運営実施計画の進捗、今後の日程について事務局から説明をお願いする。

事務局

(これまでの流れと今後のスケジュールについて説明)

勝又副分科会長

今年度中に基本設計をまとめるというスケジュールである。何かご意見はあるか。何もなければ、管理運営実施計画について、説明をお願いする。

事務局

(管理運営実施計画について説明／参考資料2～5)

勝又副分科会長

いまのご説明に対して質問等はあるか。桧森委員には、補足を是非お願いしたい。

桧森委員

補足させていただく。参考資料3をご覧ください。中長期展開のイメージ図として、末広がり発展していくイメージが示されているが、それにあわせて予算が増えていくということではない。昔は、ハコモノ批判に 대응するために自主事業を一生懸命やるのがトレンドであった。今は、もうその時代は過ぎ、事務局からも説明があったように、「連携」「協働」の時代である。この資料に示されている全ての事業について、それぞれ、連携、協働という形ですすめていくものが増える。

例えば、私が以前プロデュースしていた「ハママツ・ジャズ・ウィーク」では、市がつけていた予算は800万円であった。しかし、総予算は5600万円であり、その差額は、入場料収入と市内企業の協力であった。また、地元紙等のマスコミの協力もあった。

芸術文化創造センターの目的を実現するため、あるいは施設の存在意義を示すために、センター側が企画して実施していく事業を「自主事業」と言うが、その実施の仕方については連携、協働により、多様な主体と一緒にやっていくというイメージであり、その中にはもちろん市民との連携、協働によってすすめていく事業が沢山あるとご理解いただきたい。

勝又副分科会長

ありがとうございます。想定される自主事業以外に、通常の貸館もあるということで、施設としては

かなり多様な催しが行なわれるということになる。他にご意見がなければ、議題の「パブリックコメントの意見について」にうつらせていただく。

次第2 議題(1)パブリックコメントの意見について

勝又副分科会長

事務局から説明をお願いします。

事務局

(パブリックコメントの意見について説明／資料1、2)

勝又副分科会長

資料2を見ながら進めていきたい。この一覧に沿って、寄せられた意見について、委員の皆さんからご意見やご提案を頂きたい。場合によっては、新居さんに、設計案を検討している中でのご意見や解説をいただきながら、議論を進めていきたい。本日の会議で全ての結論を出すのではなく、パブリックコメントで特に意見の多かった項目や、問題解決が難しい課題を抽出し、議論をした上で、今後の設計案の絞り込みの作業に反映させていくという位置づけが考えられる。また、ここでの議論は、パブリックコメントの回答にも反映されると考えている。なお、この間に開催された市民ワーキングや専門分科会に参加された専門委員もいらっしゃる。その時の状況を踏まえながら議論をすすめていきたい。場合によっては、管理運営実施計画にも係ってくると考えられる。

では、委員から、ご意見をいただきたい。資料2をご覧頂きたい。一つ一つ読みながら進めていく時間はない。皆さまも事前に読んできていると思う。パブリックコメントの中には、すでに設計で解決済みと考えられるもの、今までの議論から取り入れることは難しいものもある。また、考え方等、整備全体についてのこともある。この委員会では、建設計画専門分科会ということで、主に基本設計に関わる部分を中心に、ご議論いただきたい。

まず、大ホール、舞台関連、オーケストラピットに関する事で、ご意見はないか。特に市民ワークショップではオーケストラピットについてかなり議論がなされたと思うが、それを含めてご意見等いただけないだろうか。また、委員だけでなく、市の方でもお考えのことがあれば、ご発言頂きたい。

オーケストラピットを使うのは、オペラやバレエなどが考えられるが、私も気になったので、2000年以降に開館したほぼ同規模の公共ホールについて、オーケストラピットの利用状況を調査してみた。まだ論文を仕上げている最中なので、まだ正確にご提示できる段階ではないが、思ったよりも使われている、という印象があった。平均すると、年に5回くらい使われているという結果になっている。以前、新居さんからもお話しがあったが、お金があれば電動にした方がよい。また、これからの劇場を考えれば前舞台としての利用も当然考えるべきである。あとはコストとのバランスだと思う。いかがか。

市来委員

現在の舞台芸術の公演では、前舞台を利用することは非常に多い。もう一つには、倉庫の問題があり、何らかの形で可動する迫りがあれば、奈落を倉庫として活用できる。これも非常に有効である。まず、オーケストラピットと考えるよりも、可動床として考えるべきである。そして、舞台面に可動床があるよりは、オーケストラピットの領域にある方が、多目的に使える。可動床として必ず、しかし、あまり大がかりにならずに、実現できればよいと思う。前舞台を仮設で組む手間や、倉庫が足りなくなる懸念に対して、可動床を設けることは、経費的にも見合うと考える。

桧森委員

ホールの計画を考える上では、「建設費」と「管理運営費」の両方を見なくてはいけない。建設費は一

度きりなのに対して、管理運営費は何十年にもわたってかかり続ける。最初に、きちんと考えて「いかに運営にコストがかからないようにするか」を鑑みなければならない。通常のホール計画では、建設の際に管理運営に利害関係のある人がおらず、そういった意見が出にくい。今の市来委員のご意見は、その典型的なものである。いま考えておかなければ、全て、将来の余計な人件費となっていってしまう。

運営の際には、例えば次に借りる人のために舞台のセットを変えるということも、全て、「時間イコールコスト」となる。オーケストラピットを手動にするか、電動にするかという話があったが、そもそもコストを考えれば、手動ということは全く考えられない。

勝又副分科会長

この場で結論を出すわけではないが、私も委員の皆さんも電動がよい、電動であるべきと考えている。項目を先に進めたい。客席、もぎり、クローク、楽屋等に関係する部分について、いかがか。客席は基本計画では1,200席と示しているが、このあたりのコメントについてご意見はあるか。

桧森委員

16番のご意見のとおりだと思う。市民が演じることと鑑賞の要求を同時に満たす席数だと思う。

もぎり・クロークについても発言させていただく。おそらく、左側のエレベータの横がもぎり線になると考えられる。ここにレセプションの方が立ち、入ってくる方のチケットをもぎり、パンフレットを配る場所になる。図面ではカウンターに「もぎり・クローク」と書かれているが、カウンターでもぎることはない。

設計者 新居千秋氏

誤記である。クロークだけである。

桧森委員

もぎりは誤記であるということで承知した。クロークについては、それを運営するのにコストがかかるため、なるべくクロークは設けたくないと思っている。現実的には、代わりにコインロッカーをクローク代わりに使っていただく、という形になると思う。このカウンターは、当日券売り場として有効である。また、招待受付としてもこういったカウンターは必要であり、そういう形で活用されると思う。クロークとして利用する場合は、ホールを借りて催しを行なう側がクローク要員を置くことになり、その分のコストがかかるので、設備があっても使われないことが多い。そのように考えると、現在の案では、コインロッカーが自動販売機のところだけであり、クローク代わりとして充分かどうかの検討が必要であると思う。

ついでに小ホールのもぎり線についてだが、ホワイエ左側の点線を想定しているとするとう開口部が広すぎる。お客を裁くことを考えると、エントランスから入ってくる通路のどこかに机を何本かおいて、チケットを切る形になるだろうと思う。このホワイエの左側の点線は開口か。

設計者 吉崎良一氏

扉をつけようと話をしている。

設計者 新居千秋氏

全体の図面を直している。小ホールの主催者控室があるが、その点線の内側で行なうことを考えている。このラインはもうすこしまってくるが、パブコメの別のご意見で、広場との連携というご要望もあり、開けるようにしている。運用によっては、手前に出せるようにする。手前にある通路分は、小ホールを使っていない時には閉めて、パブリックに開放するなどの運営もできるのではないか。

2月2日の意見交換会の際には部分的にお出しできると思うが、トイレの位置や、避難経路などを見直して、ホールのホワイエ周りの計画を変更している。コインロッカーが十分かどうかは確認していな

かったが、皆さんのご意見、パブコメのご意見、基本計画に記載されていた内容は全て含めて、設計案を整理しており、だいぶ解決できている。2日を目指して鋭意努力をし、見ていただきたい。

大ホール横のカウンターは「もぎり・クローク」と書いてしまったが、誤記であり、基本的にはクロークゾーン、そして、表周りのお客さんが裏周りに勝手にいってしまわないための区切りでもある。大スタジオの利用については、あとでギャラリーのところとあわせてご説明させていただくが、だいぶ改良している。

桧森委員

もぎり線の部分で、幅があまりに広いと、別途何らかのバリケードが必要になることを危惧している。

設計者 新居千秋氏

最も広い部分で5.4m程度である。広すぎる部分もあるかもしれないが、区画を考える上では、排煙等に関する問題もある。できるだけ自然排煙で全て出来るように考えている。目に見えない区画も減らせるように考えている。どちらも、必要な部分だけを開けられる形のものになるようにする。

桧森委員

承知した。

勝又副分科会長

デザイン的には「ロッカー」はあまり好まれるものではないと思うが、小田原までわざわざ何かを聴きに来る人、観に来る人は、大きめの荷物を持っていることも考えられる。そういったものを置くニーズは多いのではないか。近年出来た公共ホール施設は、意外にコインロッカーが充実しているように思う。

桧森委員

その通りである。コインロッカーの稼働率は高い。設計者の方がコインロッカーを嫌うことは多く経験しているが、絶対に必要である。

設計者 新居千秋氏

全ての設計者を同じようにくくらないで頂きたい。ロッカーも入れており、自動販売機も考えている。ただ、見せ方はきちんと考えたい。折角、格調高く色々なものをつくっているのに、入口のすぐそばでコインロッカーが並んでいるのが直接見えるというのは避けたいと思う。

もぎりについては、経験的に5m40cm、6枚の扉くらいがマックスと考えている。そこを絞って、比率を計算して入れようと思う。すでに改良しており、2日まで待っていただきたい。

勝又副分科会長

2ページでは、楽屋についてもコメントを頂いているが、いかがか。建築計画的には、標準的にこれくらいのホールでは、これくらいの人がある、というデータがあり、それを検証していただければ十分かと思う。もちろん、想定された人数を超えるものがくることは当然ある。その際には、階段を使って2階のワークショップルームを使う、あるいは会議室、大スタジオを使うということが出来るプランになっている。

設計者 新居千秋氏

基本計画にある員数は確保している。若干意見の食い違いがあるとすると、小楽屋が少し大きめになっていることである。お風呂が必要という声もあり、僕らはそのサイズがよいと思い、その大きさを取っている。

あと、先ほどの客席のことで、実は、1200席ぴったりにと言われると、申し訳ないが、斜線等の問題もあり、難しい。自信を持ってお薦め出来るのは1173席であり、27席だけは、どうしても入らない。

見えなくてよいということであれば 1200 席入れるが、視線チェックを行い、音も完全に聞こえることを確かめ、さらに 4 月に国交省から示される基準に沿って補強した滑落しない天井をつくらなくてはならない、ということなども含めて考えると、小ホールは 315 席前後、大ホールは 1173 席となりそうである。今も鋭意努力している。席数が増減しているのは、音の悪い席をつくるわけにはいかないのでシミュレーションを重ねているからである。小ホールは永田音響が完璧だと言っている。大ホールはまだ検討中であり、僕はコストの問題で高さをもう少し下げたいと思っているが、シミュレーションをあと 6 回くらい繰り返せば、誰にも負けないものが出来る。そうすれば、皆さんにも音の反射の状況をご説明できるようになる。1173 席が今の僕のお薦めである。障がい者の方の席は 6 席とっている。8 席にすると、後ろの席の音響的な減衰率が大きすぎてしまい、難しい。普通より少し多い席数でよいと言っていたきたい。シミュレーションは、最初に 1 回行い、その後、形が変わってから 2 回繰り返している。基本設計の時点で、通常の実施設計レベルの確認はできると思う。その後も、最高と言ってもらえるように、角度などを少しずつ繰り返しやるつもりでいる。今の客席数で許していただきたい。

桧森委員

客席数については、私が許す、許さない、という問題ではないが、個人的には許容範囲内だと思っている。無理に席数の辻褄をあわせたために、売れない席が出来ているホールもある。それがないのであれば、1173 席は、ニアリーイコールで、よいのではないか。

勝又副分科会長

なるべく基本計画の数字に近づけていただくということにはなる。見えない席を竣工後かさ上げしたという事例もある。新居さんはサイトラインについて全席シミュレーションを行なわれているのではないか。

設計者 新居千秋氏

サイトラインのチェックと、音のチェックをしている。僕らと永田音響は連動しており、材料や平面図、断面図を変更すると、その内容でチェックしたものが返ってくる。実施設計の間に、何度もシミュレーションを重ねていくと、よいホールができる。例えば、大船渡のホールは今年の公共建築賞をたぶんもらえるし、少なくとも小田和正には好きだと言ってもらえている。仙台のオーケストラの人にも気に入ってもらえていて、よくテレビにも出ている。小田原は、もっと東京に近いので、必ずそれ以上のものを狙う。僕らが設計した中で同等かそれ以上を狙う。僕らが何度も設計し直せば、よくなる。シミュレーションは 1 回目より 2 回目の方がよりよくなる。絶対、負けない。

勝又副分科会長

次の項目に進みたい。3 ページに進む。倉庫、搬入については、以前の新居さんのご発言で、どこに何を入れるかシミュレーションして決めるということであったので、心配していない。小ホール等については、いかがか。今のところ、基本計画通りのものが出来ているのではないか。特にご意見がなければ、今日一番議論をしたいギャラリーに進みたい。

ギャラリーについては 3 ページから 5 ページ、ギャラリーと関係するところとして、大スタジオについて、5 ページから 6 ページにある。色々なご意見が寄せられている。現状の図面では読み取れない部分もあるので、一度、新居さんの方からご説明していただけるか。

設計者 新居千秋氏

皆さんから頂いたパブリックコメントも含めて、検討を重ねた。今の状況をご説明するので、そこから議論して頂きたい。

- ・スタジオ： パブリックコメント時は、大スタジオは浮床では 7 間×7 間と少し出っばったスペ

ースが使えるというお話しをし、8間とれないかというお話しがあった。中スタジオは6間×4間で、簡易な防音とご説明したが、浮床にして、何千万円かかることになるので壁面全周はできないが、ある程度の防音に改良している。

- ・大スタジオ： ギャラリーと大スタジオの間の空間は、劇団四季の春と秋の劇場の間の広さとぴったり同じである。楕円形の空間になるが、その部分だけ大スタジオにだけないか、というのがパブコメ案の時の僕の考えであった。また、大スタジオを出っぱらせた部分から搬出入をするということも考えたが、遮音性能の確保が難しい。技術的には可能だが、シャッターを2回間に入れるなどすると使いにくくなってしまう。ここは、普通の防音でガラスになっており、中をみせたくない時には閉めるという形にできれば、というお話しをした。

その際に、使い方、ギャラリーとの併用についても指摘をされた。8間×8間をとることは敷地の条件からも出来ないので、少しでも広くすることを検討するとともに、想定されている展示、バレエ、演劇の全てができるかどうかを確認する、と約束をした。

現段階では、倉庫に、組み立て舞台用のアルミのひな壇などで、展示の方の必要なものまで考えると、倉庫にものが収まらない。小ホールの倉庫を大きくし、一部、大スタジオと小ホールで兼用できる備品を、そちらにもっていくことで、美術系の方の倉庫もとれるかどうか、あたっている。

- ・ギャラリー： ギャラリー系の面積として、私たちが応募したときの状況で350㎡であったが、実は400㎡だという話や、パブリックコメントでも、もっと、という話がある。ただ、実際に、この敷地で使うにはこの位置が一番よい。これをお勧めしたい。三ツ山さんの運営されているギャラリーも見せていただき、改めてチェックして検討を重ね、準備スペースやリフター等も含めた収納スペースも設けた案として、パブリックコメント案をご説明した。

100号の絵を見るには、少なくとも7280mm程度の前後のスペースがないとよく見えないということを配慮して、可動壁をご提案した。しかし、皆さんから、入っていないというご指摘があった。皆さんが計算されていたのは、絵と絵の間をとらずにぴったりくっつけて計算されていたので、名前を入れる空間くらいはとれるように考え、もう一度検討をした。

ギャラリーと大スタジオをあわせると631㎡の展示スペースがある。大スタジオ側で269㎡である。展示長さはギャラリー側だけで189mあり、108枚の100号の絵と、その間に名前を入れるスペースがとれる。絵をそれぞれの可動パネルに載せられるように考えた。4mの高さのパネルは、全て収納ができ、動かすことは1人ないし2人で軽くできることも検証した。

リフターは、三ツ山さんの市民ギャラリーあざみ野と同じものであり、収納されるものも見込んでいる。ただ、他の部屋で使う想定のもの、なかなか入らない。

大スタジオ側は空間としては7間×8間にはできると考えており、その時の展示長は127mある。100号として68枚、ギャラリーとあわせて176枚、展示長は325mとなる。大スタジオ内の倉庫は、今は、バレエバー、ミラー、椅子等を考えているが、アート系の備品は見込んでいない。

ただ、大スタジオは天井高さが6mあり、可動パネルも6mのものとなる。パネルの標準品として大きなものは7.5mで、それ以上は特注品となる。つまり、6mであれば、女性1人でと言われると難しいかもしれないが、通常の範囲内であり、2人くらいで問題なく動かせるものである。可動壁の収納部分として、大スタジオを展示以外で利用したい方には、半間分の空間をあきらめてもらうことになる。7間×8間の大スタジオについては、2日の説明会、16日の委員会で、もう少し検討したものをお見せできると思う。

ギャラリーと大スタジオの間を大ホールに行く人が通るといご指摘があったが、大ホールを利用される時間帯は限られているので、運用で工夫していただけでないか。その部分はどうしようもないが、それ以外は、長さも、機能も、パネルに対してどう照明があたるかについても考慮し、かなりきちんとした展示ができると思う。

唯一出来ないのは、国立近代美術館のように膨大なすごい空調にすることではないか。それは、技術的な問題ではなく、お金の問題で出来ないと考えている。

大スタジオを展示利用するときには、4つのゾーンに割ることも出来る。巨大なものやとても長いものは搬入が難しいかもしれないが、通常の美術展示であれば、前室から十分に入れることが出来る。

展示室としては、ここに機能をまとめ、工作等を行える部屋は2階のワークショップルームで考えているので、全体では格調高いものに出来ていると思う。

ギャラリーと大スタジオをくっつけるのは難しい。天井高さの違い、パネルの継ぎ目の違いはある。パネルの材質などは今後検討して、絵画、音楽、演劇など、色々なものに使える、小田原にしかないようなものになると思う。

- ・今後の検討： あとは、コストがどうなるか、やってみないとわからない。小ホールの倉庫は45㎡だったものが75㎡になっている。美術展示の方は、特殊な場合を除けば、倉庫内に全部備わっているので、全てできると思う。壁長は325mあり、確実に展示できると思う。

以前、三ツ山さんに、「赤レンガ倉庫は“なんちゃって展示場”だ」と言われたことにショックを受け、それから二ヶ月間、色々な研究をした。これですこしはいけるのではないかと考えている。僕の知る限りの色々なアート系の技術者にあたり、これが限界かと考えている。

申し訳ないが、敷地の形状やスパンが決まっているため、今の案をさらに広くするのはできない。この図をもとに、美術系の人と、演劇・音楽系の人で、お互いにシェアできるのかどうかを話し合っただけだと有り難い。2日の説明会では、この図を出せると思う。

他にも、基本計画書にある各部屋について、全てチェックしている。全部クリアしたと思っている。今のところは、これを見ていただき、話していただけるとよい。

勝又副分科会長

数字は当然まだ多少は変動すると考えてよいか。

設計者 新居千秋氏

パブコメのチェックをおこなった。全長は325m、全体で176枚と見ている。ギャラリーの天井高さは道路からの斜線、天空率の計算で決まる部分があり、4m以上には出来ない。空調や音に問題はないようにやっているが、浮床にしたり、床吹きだしの空調にしたりするのは、お金がかかりすぎるので難しい。だからといって、普通の美術館の静かさはあり、空調も居住域空調にならないというだけで、風速等は

計算してきちんとするので、問題はないと考えている。

勝又副分科会長

大スタジオは、基本計画に沿って、あくまでも練習場としての役割は必要だが、当然、それは前提とした上で、こういった展示スペースとしても使えるということによろしいか。

設計者 新居千秋氏

練習で使う場合は、出っぱった空間にディレクターがいて、間口8間として使える。展示用の可動壁をしまったまま使おうとすると、7.5間になってしまう。ディティールを考えて、なんとか、収納場所を考えて工夫したい。

現代アートの人がやっているような映写などを使うのも、ギャラリーがあるので、備品を小田原市が買ってくれば十分にできるのではないかと思う。

ただ、これ以上広げたり、ギャラリーと大スタジオをつなげることは難しい。駐車場台数の関係で10,250㎡以上は延床面積を増やせない。今の形でも、アート系の人と演劇の人がコラボして、新しい形の、何か面白いものができるのではないか。

解決できているかどうかわからないが、これが今の精一杯である。

勝又副分科会長

三ツ山委員にご発言をお願いします。

三ツ山委員

今日は設計の委員会だが、運営にも関係している。今、横浜の市民ギャラリーをリノベーションしているが、行政の方で話がようやく固まり、利用の仕方も見えてきたので、昨日、おとといと、400近くある利用団体に対して、新しい利用の仕方の説明をお送りした。これまで出来ていたことが出来るかどうか一つの基準になるのは、どこの市でも同じである。

市民活動として、共に活動をして、お互いに励まし合い、批評しあうことができるのが、団体展のよいところである。そういった市民の熱意は承知しつつも、どうしても出来ない部分については、ごめんなさい、と言っていくしかない。最大の努力をしても、変えられないものは変えられないと丁寧に説明していくしかない。

横浜の場合は、床面積が以前に比べて200㎡ほど減るが、移動壁を工夫することで、壁の長さは維持できる。逆にやや長くなるくらいである。展覧会によって、床置きで広さを重視される方、壁の長さを重視される方、色々いらっしゃる。そういった意味では、移動壁のつくりには希望がある。

大スタジオは、本来はギャラリーではないところが、本当にギャラリーになるのか、という疑問がある。ギャラリーの不足分を大スタジオで補う際に、本当にギャラリーに変身するのか、ということがネックであった。普通のところに絵を飾るのは難しい。そういった意味で、移動壁は一つの解決方法である。高さが6mということなので、当然、途中の適切な高さにピクチャーレールはつくのだろうと思う。また、設計者が俯瞰して考える壁の見え方と、会場を実際にめぐるときの壁のあり方は違うので、そこは検討を重ねる必要がある。ただ、今回の提案で、きちんとした移動壁を設けることで、大スタジオはギャラリーに変身できる、ということでは安心した。

壁の配置については、飾りたい人によって、沢山の理想的な配置がある。沢山飾りたい人にとっての、最適な形もあるはずだ。単純に「100号が何枚」ということではない。そこは、今後、要相談である。

400㎡という要望から、大スタジオとの一体利用ということになった。私は最初に、バックヤードがどれだけ保障されるかを質問した。展示される方は表舞台に興味があるが、運営する側は資材、器材が、展示する場所が広ければ広いほど多く出てくるので、それをどう収めるのかが気になる。経験的に、理

想を言えばギャラリーが 100 だとしたら、比率的には、その 3 分の 1 はバックヤードでほしい、というのがお願いになる。400 m²の展示室、と示されれば、少なくとも 100 m²はバックヤードでないといけない、という意見をいった記憶がある。

これまで市民活動、あるいは教育活動を行なってきた団体もある。それが新しいギャラリーになったときに、それまで出来たことをどう保証するか、ということは、行政との相談によって、例えばこれまでは 1 週間という単位だったものを、規模の大きな団体は 2 週間を保証してあげましょう、という工夫になると思う。仲間が同じ時期に同じ空間でやるのが大事であるということは、よくわかる。よくわかるが、では、2、3 段掛けしますか、という話も含めて、もしかしたら 1 期、2 期という方法もあるのではないか、などという話を、横浜の場合は、団体と相談させていただいて、やっている。

ギャラリーの面倒をみる立場の委員としては、なるべく広く、なるべく壁を長く、という話をさせていただく。横浜でも設計者と定期的に話をするが、壁などは丁寧に作りこんだ提案をしていただくことが多い。しかし、逆に、もっと乱暴につくってください、という話をする人が多い。移動したり、塗り替えたりすることがあり、何もせずに完成時の状態がそのまま 10 年、20 年たつということは、壁についてはありえない。1 年に数回はリタッチも行う。横浜の場合は、年に 1 度、全面塗り替える。そういう意味でギャラリーの壁はたえず動いている。そういうことがあるので、乱暴につくって欲しい、という話をしている。「乱暴」という言葉の度合いもあるが、そういうことだ。

広さについては、他の部分との関係もあり、大スタジオが移動壁で展示ができるということによかった。私は、バレエのバーなどをよけて作品を置けると言われるのではないかと心配していた。

設計者 新居千秋氏

バレエのバーは倉庫の中に入る。

三ツ山委員

限りなくホワイトキューブになるという理解でよいか。

設計者 新居千秋氏

よい。

三ツ山委員

では、私が知恵を絞っても、これ以上の話は出てこない。一番の特徴は、ギャラリーだけ搬入口が正面にあるということだと思う。つまり、舞台の裏方は反対にあるが、ギャラリーは表からとなる。また、プラットフォームはつくれないので、リフトはつけてくれ、という要望はして、反映していただいている。そんな搬入が年に何回あるのか、という声もあるかもしれないが、それはオーケストラピットと同じで、なくては困るので絶対に必要である。

設計者 新居千秋氏

車 2 台をとめるスペースを確保している。今は壁を設けて、その中で準備もできるようにしているが、将来的にまちが発展し、全ての建物が道路から 20m ひいてきた場合は、壁を別の側に移設しても問題なく使えるよう、リフターは軸で回転するタイプにしている。将来的な景観上の変更にも対応できる。

展示用の備品はここと、もう一カ所の展示用の倉庫で対応できるようにしている。大スタジオ側の倉庫については、今の時点ではミラーとバレエバーと、小ホールと兼用できる舞台系の備品を入れることを考えているが、どれほどアート系の道具を入れるかは、実施設計の時間も利用して、皆さんからご意見があればそれも集約して、使い勝手がよいと言われるものにできるよう検討していきたい。

大スタジオ側の展示パネルは、今は 1.8m 程度のものを考えている。それ以上は動かすのが大変だと考えている。何種類かの展示パターンができるように考えている。国立近代美術館のように格天井のよう

なところまでつくりこめるかどうかは、お金の問題も関わってくるので、何ともいえないが、きちんと、格調高く、照明もきちんとあたるように考える。6mの高さだが、リフターを持って行くことで、無理なく掛けられるのではないかと考えている。

あとは、大スタジオとして、市来さんに「よい」と言っていただけると嬉しい。

勝又副分科会長

では、市来委員に大スタジオについてご発言をお願いします。

市来委員

大スタジオが苛められている。とはいえ、まず空間として8間を確保していただいた。8間×7間を確保した上で、可動パネルをどうするか。収納の場所は、今想定されているようだが、別の場所でもよいのではないか。1間四方のところ、このパネルが溜められるようなことも考えて欲しい。また、小規模な舞台芸術公演の利用の際に、舞台面をどちら側に持って行くかによらず、例えば間口をきるパネルとしても利用できる、袖パネルとして利用できるなど、多目的に利用できるようにしておいて欲しい。そのためには、展示のパネルのための表面と、袖として使うための表面を両立しておいていただく必要がある。例えば、アイデアとしては、ギャラリーは4mであるということにあわせて、4mよりも上は黒くしておいていただき、4mのところはピックアップレールとロールカーテンの黒をつけておく、ロールカーテンを落とせば黒パネルになる、などが考えられる。それは実施設計など、詳細を検討する段階で、パネルのつくりこみ方や、パターンを色々考えていただきたい。可動壁があることで、逆に面白いことができるのではないかと、逆に考えることができるようにしたい。6mのパネルの存在感は大きい。構造上どうしようもないのであれば、上手く利用しながら解決してほしい。

三ツ山委員

私からも意見を言わせて欲しい。先ほど、パネルの幅が1.8mということであったが、これはダメだ。展示壁は線がないのが一番よい。移動パネルの場合は仕方がない。どうしても合わせ目が出てしまう。しかし、それが1.8m毎では、とても作品を飾る環境ではない。しまい込み易くするために幅が狭くなるというのは、展示壁としてダメージが大きすぎる。最低でも2.5mは必要だ。

市来委員

では2.4mをお願いします。舞台サイズ、8尺としていただきたい。

三ツ山委員

1.8mと聞いて、本当にドキッとした。

市来委員

そのへんも含めて、検討していただきたい。パネルの収納はこの位置だけ、ということになってしまうと、それは違う。それは融通がきくようにしていただきたい。上の周囲をギャラリーがはしっているので、納められる場所が限られてくるとは思うが、検討していただきたい。

設計者 新居千秋氏

検討する。僕らが八丈島でやった劇場は、現在コトブキの宣伝に使われている。そこで入れたパネルは表裏があり、展示と吸音できるようになっている。できるだけやってみる。技術的にやれないことはない。申し訳ないがお金が少し足りないかもしれない。やれる範囲で考える

可動壁を薄くして寄せると8間×6間は正確にはとれる。市来さんがおっしゃったような位置に配置すればそこまではとれる。そこから先は、技術的に壁をどれだけ薄くできるか、といったことになり、誰もやったことがないものを考えるには時間が必要である。問題は必ず解く。問題は、パネルの自重、つまり一般の人が軽く動かせる範囲である。僕が計算する際は、女の人が2人で動かせるかどうかを基

準にする。特殊なスタッフがいる場合はよいが、基本的には市民の人だけでやれる範囲としたい。特殊なことをすると、何かを持ってこなくてはいけなかったり、地震の際に危ないということもある。できるだけ、目地のない、まっすぐなパネルを考えている。しかし、一部に重さが必要。どういったつくりにするか。ここは音の問題はないので、やってみる。4mのところにはピクチャーレールをつけることは難しくない。また、市来さんがおっしゃったような斑のパネルというのは気持ちが悪いので、6mまで白として、そこから上を黒にしたい。

市来委員

6mのロールカーテンは大きくならないか。

設計者 新居千秋氏

赤レンガ倉庫を手がけた時も関西と関東の人が、天井が白か黒かでもめ、12回も変更した。結局、黒と白になった。6mまでは白で、暗転すると暗くなるので演劇はそれほど問題ないと考えている。そこから上、キャットウォークなどは黒くする。アート系でも使う照明なども黒くすれば、全体には、あまり違和感がないのではないか。可動パネルについては、バンバン釘を打って使うなどという、だんだん重くなってしまふ。

三ツ山委員

あざみ野は1枚が3.8m×2.4mだ。

設計者 新居千秋氏

ギャラリーはあざみ野より大きいところまできた。

三ツ山委員

また、極めて軽く動く。横浜の新しいギャラリーの設計者の方が、この間、移動壁の見本を見せてくれたのだが、ギョッとしたのは、アルミ枠があったことだった。「金属部分は白く塗装します」と言うが、「とんでもない、やめてくれ」と言った。壁であり、額縁ではない。木にして、全て包んでくれ、と。金属のフチは質が違う。色が白ければ一緒ではない。質が違うものは邪魔だ。

作品は時代によって新しくなるが、それを飾るべき壁は、太いネジをうって、200kgを吊っても壁が落ちない、という厚さが必要。表面は、今はグラスウールを貼ったものもあるが、基本的には寒冷紗でよい。それは新しくならない。300kgくらいの作品を飾ることもあり、穴を開けることもあるが、木をいれて塞いで、という作業は我々がやる。壁は少なくとも20mmくらいの木にしてほしい。1.8mはなしだ。

設計者 新居千秋氏

おおよそできるが、今、176枚を飾ることを想定した。そこまで要求されていなかったが、そのためには、十字形に壁を組もうとすると、1.8mという短い壁が必要になる。全て長い壁でよければ、3.6mなどができる。しかし、その際には、100号が160枚くらいになってしまう。あるいは、市民の皆さんが計算されていたように、絵と絵の間を隙間なくつめていけば、出来る。ただ、隙間があつて、格調が高い方がよいのではないかと考えた。

三ツ山委員

移動壁の動き方やパターンについては要相談と申し上げたのは、新居さんの想定している真ん中の十字形に違和感があったからだ。そういう使い方をするのは、個展だけではないか。団体展では考えづらい。壁と壁がくっついていて、歩きながら多くの作品が見られることが必要。天井につくレールによって何パターンか考え得ると思うので、それはそれとして、壁として、最低2.5mは欲しい。

勝又副分科会長

2.4mでもよいか。

三ツ山委員

10cmはよい。

設計者 新居千秋氏

考える。もう一つ解かなくてはいけない問題は、壁面の吸音である。吸音を6m上でとってできるのかはシミュレーションしかないので、実施設計の際に考える。何ヶ月かあれば、必ず何か考えることはできると思う。日本の技術を進歩させることはできると思う。ただ、全体でお金が足りない時に「もはやこれまで」ということはあるので、とりあえず、こういう方向で検討する。今は、一度検討を締めて予算を積算してみなくてはいけない。逃げるわけではないので、実施設計で続けて検討する。ただ、お互いに少し歩みよっていただいて、全体の中で、こういうやり方でいけば、パブリックコメントでのご意見に対して、僕なりにちゃんと回答できたと言える。パネルの裏表をかえることは出来ると思うが、今後検討しないとできない。面白い使い方はできると思う。白い壁になると思うが、暗くした時のことも考える。練習中は白でもよいのではないか。演劇の場合でも、真っ暗で使う頻度というのは、どれくらいあるのか。それをきちんと検討して、どうしても黒の場合は、壁の上に黒を貼ってもらうなど、何か考える。演劇の人にも美術系の人にも感動してもらえるようなものにしたい。僕のできるマキシマムとする。搬入もここでご理解いただきたい。

三ツ山委員

照明については、よく「スポットライトが何個必要か」という議論になるが、横浜の場合は、一般の方々が借りる場合、スポットライトで作品を一つ一つ照らすという演出をされる団体さんはほとんどない。ベースの照明で基本的に作品の鑑賞ができる、必要な場合だけ、スポットライトをつけられる、という形がよい。天井高さが6mでは、ベース照明は難しくないか。

設計者 新居千秋氏

キャットウォークがあるので、そこからとればよいだけである。簡単だ。目地がない長い移動壁を軽く6mでまわせるようにする方が難しい。検討してみなければわからないが、ギャラリーに比べれば大スタジオの移動壁は重くなる。

設計者 吉崎良一氏

平土間で展示も行えるような「マルチスペース」と呼ばれるものはよくやっている。通常の照明に加えて、展示用の照明も少し入れた形で、地明かりを使い分ける形で考えている。

設計者 新居千秋氏

また、LED化も行なう。照明については、今年の省エネ照明デザインアワードのグランプリも僕らであった。それを進歩させて行なう。要求を出していただき、時間をいただければ、検討する。

今の時点では、体が特に強くはない人が2人で楽に動かせる6mの高さのパネル、というと、こういったものになると考えていた。これから検討するしかない。先ほど言った自重の問題や、2400で割れるかといったこともあるので、時間が必要。

勝又副分科会長

申し訳ないが、時間が限られているので、先に進めたい。ギャラリーについては、結構議論ができたように思う。パブリックコメントはたくさんあるが、今日はひとつひとつに答えていくという形では進められない。当然、後日、市が、必要に応じて設計者やわれわれ委員と話し合っ、一つ一つの項目への回答を出していくことになると思う。ここで飛ばしたからといって、無視したというわけではないということをご理解いただきたい。今のように重大な案件について、重点的に議論する形としたい。

6 ページ、ワークショップルーム、スタジオ、管理事務室などがある。事務室については、管理運営実施計画で、どういったスタッフで企画をやっていくのかというところから、オフィスの広さが決まっていってしまう。私個人としては、裏方の技術スタッフ室なども含めて、だいぶ洗練されてきたと思っている。このあたりの諸室についてご意見はないか。

7 ページのオープンロビー、ラウンジについては、新居さんのデザインの大きなポイントになると思う。ここで、例えばロビーコンサートを開催したい等のご意見がある。色々な可能性が考えられると思うが、特にご意見がなければ先にすすめたい。

三ツ山委員

ワークショップスペースについて一つ質問がある。アート系で「ワークショップ」というと実技を指す。舞台の方もいらっしゃり、色々な方たちがここで集まる場所としてワークショップルームがあると思うが、2階の一番広いワークショップルームでは、アート系のことをする際に、ものを洗うための水場などが想定されているだろうか。

設計者 新居千秋氏

小さい方のワークショップルーム2室の方に水場を設けている。広い方のワークショップルームは中スタジオを兼ねており、床も浮床で防音的になっており、音楽利用もできるようになっている。僕としては、水場は防災上もあつた方がよいので、どこかにつけようとは思っているが、今は広いワークショップルームの隣の2室をつなげて使う方のワークショップルームにつけている。ここにはキッチンもついている。広い方のワークショップルームにつける必要があれば、今は、椅子をしまう倉庫を計画しているので、4間×6間が確保できるかもあわせて、調整が必要。

僕らの図面は、単線で描いているため変に思われることがあるが、そもそも構造が他の建築家と違うので、何かを動かすことは問題ない。実施設計が終つたあとで、そこを抜くというのは難しいが、今の段階で言うのであれば、もしも、水回りが広い方のワークショップルームにも必要だということであれば、検討する。この範囲で寸法を調整して盛り込めるかどうかによる。

勝又副分科会長

2階のワークショップの水場については、今日のはじめて出てきたご意見であり、それは一度事務局で整理していただきたい。

桧森委員

オープンロビー、ラウンジについて一言だけ申し上げたい。77番と81番という正反対の意見が出ている。77番が反対論、81番が賛成論である。オープンスペースのイメージは可児市の文化創造センターのイメージである。もちろん、色々な人が来る場でもあるが、私はどちらかと言えば、文化に関係のある人が来て、打ち合わせしたりするなどの使い方を考える。そのためには、インフォメーションや事務室のスタッフ、技術スタッフが、ある意味で、図書館でいうレファレンス機能を持つ。2階のオープンスペースで打ち合わせをしている市民の人が、聞きたいことがあつた時に、下の事務室に行つてスタッフの人に質問をしたり、という使い方を想定している。

全く何の関係もない人がここで時間を過ごすこともあると思う。その際には、可児にもあるが、フリーで読める芸術関係の雑誌や資料、パンフレットなどが用意されていて、それを見ながら時を過ごす、というようなことを想定したい。77番でも81番でもないオープンスペースの使われ方ができると思う。

設計者 新居千秋氏

基本計画までで考えられている部屋は、一応全てとっている。「複数」と書かれている部屋があるが、2からが複数なので、そういった意味ではクリアしている。

一方で、この建物にはもう1個使命があり、交流で人がにぎわうことが必要である。その分を含めて、僕らの経験上、オープンスペースを入れている。

今、「フリースペース」と書いているスペースは、お金の調整によってはなくなる可能性もある。オーケストラピットよりも先に、こちらを削るしかないと考えている。今は、位置は調整して変更している。

2階の真ん中にあるいくつかのオープンスペースは、先ほど桧森委員がおっしゃったようなものと考えている。大スタジオが巨大に立ち上がってくる。圧迫感のある壁ばかりになるのはよくないので、そこにベニヤ板程度ではあるが、色々な資料を置けるような棚などをつくって、それをここで読んでもらうくらいのことを考えている。金額的に厳しい場合は、部屋ではなく、平らになる。ただ、ここには床があるので、全くなくなることはない。お金の問題もあり空調は考えていない。騒ぐ人や、大きな音を出す人は区画された小スタジオ、みなさんが基本計画で考えられたところまでやる。それ以外の僕が描いているスペースは、国から予算を取りやすいように、ということも含めて入れているだけであり、もしも金額的にダメだった時には、まず削る。

オーケストラピットについても、僕は可動の方がよいと思っているが、色々な段階を踏んで検討する必要がある。茶室などについてもコメントが寄せられているが、今、日本文化などは、オリンピックもあり、補助金等が貰える可能性も高いと思って設けている。もしも、お金的にこのまま設けられそうな場合は、位置は、大ホールの前くらいの見えない位置にもってこようと考えて、位置を調整している。

パブコメが出たのが12月で、整理しながら進めているが追いついていないところもある。オープンスペースについてガンガン論議されても、僕らとしては規定外、エクストラで入れている項目であり、その目的は、交流施設としてお金を貰えないかということである。あとは、桧森さんのおっしゃるように、お金を払わなくては使えない部屋だけというのは少し淋しすぎると思う。僕が「まかせて下さい」と言ったのは、「特殊なデザインがしたい」という意味ではない。家具を置く形にするか、上までオープンにするか、という程度のことである。空調は、ランニングコストを考えると、このエリア一帯でおさめる形がよいと思う。1コ1コスペースごとに空調を載せることは技術的にはできるが、コストもかかるので、ここは必要ないかと考える。全体に対してはあまり大きな部屋ではない。

オーケストラピットを設けたいという話があるが、設けた場合は、外した椅子をしまうスペースなども確保しないと難しいので、いらないところを削ったり、色々と調整をしている。

オープンスペースについて大きく論議されても、金額的な調整でなくなってしまう可能性も大いにある。もしもできれば、家具くらいは置いておいた方が使いやすいと考えている。

1Fのインフォメーションは、なかなかお返事出来ていないが、小田原らしい材料とか、喫茶店の前に小田原のものくらいは置いておいてもよいと思い、そのような形にしている。これだけものがあって、オープンロビーのコンサートをやるから、音をちゃんとしろ、と言われると、ちょっと今の予算では難しい。遮音の必要がないのであれば、コンサートはできる。イメージとしては帝国ホテルの椅子があるスペースである。全体は一体的に自然排煙にして、置き家具で間を仕切るくらいのものを考えていただきたい。そうしないと、コストもおさまらず、ものすごく冷たい感じの建物になる。

とはいえ、このあたりについては、スタジオなど先に解かなくてはいけない問題があり、十分に検討しつくしたわけではない。実施設計でも考えなくてはいけない。そういった意味で、前回は「まかせて下さい」と申し上げたら、これほど沢山のコメントがきてしまった。僕の意図では、今までの経験で、予算をとるのに有利だと聞いたので、それを少しでももらえるように、また、2Fのオープンスペースを設けているところは、何もしなければ下に穴が開いてしまうことになる、床は絶対に必要などころなので、その分だけ、やれる範囲でまかせてほしい、ということだ。とてつもないものが入るわけではない。

勝又副分科会長

まだ議論は続くが、だいぶ時間がたったので、一度休憩としたい。

桧森委員

今後の議論でポイントとなるところは、どのあたりか。

勝又副分科会長

コストの問題が大きいかと思う。この委員会として検討しなくてはいけない項目は進んでいる。では、10分間の休憩とさせていただきます。

<休 憩>

勝又副分科会長

議論を再開したい。よろしいか。19ページまで項目があるが、この委員会で全てを議論するわけにはいかない。ただ、全てのご意見については、パブリックコメントとして当然、市、委員、設計者で検討した上、回答するということになる。

7ページの下、施設全般については、多種多様なご意見がある。南側の住民への配慮など、配置計画をする上で重要な問題もある。ご意見としてかなり多様であり、整理して考えていきたい。近隣の配慮について、設計者の方で想定があれば、一言お願いする。

配慮について想定あるか。

設計者 新居千秋氏

近隣の方には配慮している。そちら側の1階は、窓を設けていない。根津美術館くらいの距離があるので、木を植えるなど、やれる範囲の配慮をしている。スタジオの前には避難上必要なテラスがあり、避難する際のみは出なくてはいけないが、通常も出られるようには考えていない。ロックがかかっており、1段上がって出なくてはいけないテラスである。施設側から視くことは原則的に出来ないようになっている。明かりをとるのにガラスが必要な場合は、曇りガラスにする等の工夫をしている。機能上、大スタジオやギャラリーをカットすることは出来ない。ギャラリーの高さも4mという低いところから始まっているので、それほど心配していない。

勝又副分科会長

施設全体について、特にご意見がなければ、先に進む。11ページ、広場、車寄せ、駐車場についていかがか。今回は専用の車寄せがあるわけではないが、建物まで雨に濡れずに来られるようにはなっている。駐車場は条例上の必要台数を確保し、誰がどう利用するかは今後の検討と考えられる。

桧森委員

一つ質問したい。広場の素材はどのようなものをお考えか。

設計者 新居千秋氏

今は、赤レンガ倉庫のような、石のようなものを考えている。美術品を置くなど、多用できると考えている。原則としては土などは汚れも出るので出来ないと思う。車両がのり、ものが入れるが、普段は入らないという状態がよいと思う。車寄せは、黒い斜線のついているところに庇があり、バスのような大きい車も入れるように考えている。障がい者用の駐車場も、雨に濡れずに入れるように配慮している。

桧森委員

あまりあっては困ることだが、万が一、表方の方で事故があった場合、救急車は正面から庇の下を通って入ってくるのが考えられる。

設計者 新居千秋氏

今の状態では、救急車でも消防車でも、そういう形になると思う。近隣の方がよいと言っただければ、裏と表を繋ぐ部分を抜くことが考えられるが、近隣の方とのご相談になると思う。今は、閉じた形にしている。

勝又副分科会長

12 ページ、通用口、救護室、テラス、樹木、などについては、いかがか。高齢化が進んでおり、救護室も必要になってくると思う。当然、兼用という形になってくると考えられる。原則は、なるべく早く救急車で病院にいていただけるように考えるべきだとは思う。治療を行なう部屋ではない。

桧森委員

オーチャードホールは、救護室は主催者事務室と兼用している。

設計者 新居千秋氏

今は会議室との兼用で考えている。救急車へは、小ホールの搬入口から出るのが一番よいと考えている。そのために、この会議室に、人が横になれるような設備がちゃんとあることが大切。大量に病人が出た場合は、どうしようもないが、他の施設でもそうだと思う。

勝又副分科会長

運営上のシミュレーションが必要かと思う。搬送、救急車の配置、連絡など。13 ページ、計画全般についてというところで、この委員会としては議論しにくいところである。事業については 15 ページ、16 ページまで続いている。このあたりは、市の方で整理をして答えていただきたいと思う。17 ページで、その他、機能分担、役割分担、管理運営、ランニングコスト等がある。このあたりは管理運営分科会でもご検討いただく内容かと思う。このあたりについて、いかがか。

桧森委員

自主事業についての話が出た。239 番や 241 番など、「芸術文化創造センター」という名称から、何か高尚なものをやるのか、芸術家が芸術を創造するようなイメージを持たれている方もいらっしゃるようである。しかし、これまでも多様な市民のニーズに最大限応えていくという方向で施設を考えてきたし、事業もそのような形で考えていくことになる。例えば自主事業で演歌はないのか、というご質問があったが、演歌も、ポップスも、主催事業としては難しくても、共催事業としては当然あると思う。そういう形で事業の方向性に色をつけようと考えていない。できるだけ多くの方が参加して創造活動ができるようにという方向で考えている。

勝又副分科会長

少し前に戻るが、ここでの議論が難しいことではあるが、コストについての課題がある。新居さんには、削減のために色々努力していただいている。今後もこれを続けていただきたい。建設の専門家の方々の、現在の建設コストの状況をみていると、かなり厳しいものがあると感じる。時期的にはあまりよい時期ではない。コストについては市でも十分考えていただきたい。絶対確実な情報かどうかはわからないが、来年度半ばがコスト的には数値のピークではないかと建設業界では言われている。不調となった事業もある。丁寧にやっつけていかねばならない。

コストでもめるのは、たいてい、実施設計の中盤から終わり頃、設計見積もりを行なって、おさまらないと大騒ぎになる。このプロジェクトでは早い段階からコストを気にして頂いているので、将来的に大きなトラブルがおきる可能性は低いと思う。

次に 18 ページ、舞台設備業者選定プロポーザルについても、コストとの関係や、よりよいものをつくるにはどうしたらいいかという視点で、どうしたらよいかを考えていくしかない。

設計者 新居千秋氏

僕は、どなたの意見も聞いてやるが、このプロポーザルは難しいと考えている。ただでさえ、お金があわない、建設会社から見積もりの増加が来る。総合図を誰が調整するのかということが、どんどん不明瞭になる。舞台設備業者選定プロポーザルについては、僕は自信がないし、一番新しい方法でわざわざやってつくれなくなるよりも、今の段階で一般的な方法でやる方がよい。コストについても、できるだけ努力するし、何かを隠れてやることもない。全て説明して、公に説明してできると思う。しかし、舞台設備プロポーザルについては、疑問がありすぎて、何回言われても、僕はできないと考えている。

新しい方式をやる場合には、色々なことを考えなくてはいけない。それには時間もない。今の、この状況下でこれをやるために、何かをやめることになってしまうよりも、みんなでがんばって60億に近い形になるようにする。何かを諦めるのではなく、その中でやろうとする。

パブリックコメントに僕と市来さんの仲が悪いように書いてあるが、僕は専門委員の人と毎回話をし、今のような話もしている。皆の前で、公開でやらせて頂ければ問題ないと思う。実施設計の間も、機会を頂いて正確に説明させていただければ、僕はやれると思う。僕も、皆さんも、ここに一番よいものをつくりたい。そのために無駄なお金はかけられない。余計な時間をかけるくらいなら、皆さんに説明して、普通にやる方がよい、と僕は思う。

どうしてもこの方式をやるならギブアップするしかない。オーケストラピットだって、僕らはあつた方がよいと思うので、断面も検討してきちんとやっている。ただ、僕らがコンペに応募した時には見込んでいなかったということ理解していただきたい。今は、つける方向でやって、どうするかを考える。

普通の建築家は興味がないのかもしれないが、音などについても、僕らがつくるのであれば、一番よいものをつくりたい。後ろめたいことは全くないので、説明させていただいて、その上で、コストを頑張らなくて縮めたほうがよいと僕は思っている。

日本人は一度決めたことは絶対あやまらないで、失敗を繰り返している。そうしない方がよいと僕は思う。心配ならば市来さんを僕のお目付につけていただいて、言われたことは全て検討する。しかし、これについては、僕の意見として、終始変わらず「できない」と申し上げる。

あとはどのようなことを言われてもやる。先ほど、三ツ山さんから言われたような話だって、調整するのは大変だ。現場に行って、片一方が決まっても、片一方が決まらない形では、説明できない。現場に行ってから僕らが判断してよい状態でやらせてほしい。それが普通の今までのやり方であり、そのために失敗があったということもない。僕らが今までつくったものに、問題はなかったと思っている。桧森さんがこれまでに出会われた建築家が、僕らと体質の違う人が多かったというわけではないか。やりやすくしていただきたいだけだ。コストが青天井でよいなら別だが、そうでないのであれば、できない。うちのコンサルも嫌だといっていると、僕はバンザイするしかなくなる。

市来委員

とにかくにも、まずは基本設計を年度内にあげるために、そのブレーキになるようなものは今はやめ、新居さんが気持ちよく設計することを最優先したいということ、僕から市のほうにも話してある。現段階ではそうだが、この舞台設備業者設計プロポーザルについては、一回は公になったものであり、どういうふうに変えていくかということは、今後の段階で考えなくてはいけないことだと思う。とりあえず、現段階は基本設計を、気持ちよくこの年度内におさめていただくことを最優先にしたいと思う。

桧森委員

基本的には市来さんの意見に同じだが、新居さんによくよく理解しておいていただきたいのは、なぜ業者選定プロポーザルという方式を導入しようとしたかということである。それは、過去に、有名建築

家だけではなく、様々なホールの建築プロセスにおいて舞台設備（舞台機構、電気音響、舞台照明の三設備）の扱い方が難しく、本当にいいホールをつくらうとした際に、その部分にしわ寄せがいく形になり、思うものがないケースが多かった。だから昨年度的设计者選定委員であった桑谷委員も、市来さんも、私も、この方式を推した。有名建築家云々ではない。あらゆるホール建設で、隠れた形で設計協力の業者が設計体制の内部に入って無署名で図面を描くというやり方があり、そこからホールができあがるプロセスまでの間に、様々な問題があった。電気音響設備と別に建築音響設備が大切であることは、それはそれでよい。しかし、電気音響設備、舞台照明設備、舞台機構設備は、ホールを機能させる上で大切な部分だが、それが今までなかなか上手くいっていなかった現実がある。新居さんにはご迷惑でもあると思う。何も自分が新しい方式でやらされなくてもよいではないか、と思うかもしれない。しかし、小田原のホールを本当に理想的なものにするためには、この方式がよいのではないかと考えて、この方式を採用しようとしている、ということは、ご理解頂きたい。新居さんの責任でも何でもない。

設計者 新居千秋氏

確かに、僕も新潟で24のホールをチェックしたところ、まともなものは3つか4つしかなかった。それに僕らの2つを足して、6コしか、新潟市にまともに近いホールはない。しかし、今言われている舞台機構屋を使ったホールも、たいしたことはなかった。誰かがちゃんと見ないといけない。確かに日本の建築家は、色々な人に依存している人が多い。その場合も、舞台機構の担当者には総合図を描く力はない。僕らが総合図を描くなら、それは邪魔になるだけである。赤レンガ倉庫の吊物設備も、僕が宮本亜門さんに言われて改良した。舞台機構の業者だって、僕らの設計を宣伝に使っている。それは、誰が考えたか、と言えば、色々な人の意見を聞いて、自分で解くことが重要である。自分で考えられないものは、責任が持てない。それは他の人の時にやってくれ、と言っている。

音にしても、僕らは何度も自分でやって、小田和正が好いてくれている。N響などのオーケストラも、僕らの悪口は言っていない。全てを一例に同じ建築家と言って欲しくない。城下町ホールの設計者の山本理顕さんも尊敬すべき建築家だが、僕とスタンスが違う。僕は、裏方の、誰がここに何を置くかまで興味がある。やるとしたら、自分でやりたい。

また、今の社会事情で、お金をコントロールするのは無理。万が一、舞台設備業者の人が、途中で翻って、総合図を描かないと言い出したら、僕らも描けず、誰も描かなかったら、バラバラになる。僕らは逃げるのではなく、僕らが全てを引き受けてやりたい、と言っているだけである。

ちゃんとした意見がちゃんと通らなかつたら困る。このやり方については持論は曲げられない。

桧森委員

今後、新居さんがご納得いただけるように調整するのが前提である。ただ、背景は、理解していただきたい。その上で調整をしていきたい。そこは、理解していただきたい。

設計者 新居千秋氏

エレベータだって、自分で全部考えて、人に聞きながら描いている。聞いた業者と違う業者がとっても、問題なく出来る形であるかは、自分で確認している。

舞台設備については、確かに、ある人が暗躍して、この業者でと言われて、受けなくてはいけない場だってある。業者が変わっても、僕らは監理できる。

非常に残念に思うのは、日本では建築家の職能が過小評価されていることだ。僕らの先達がそうしてきた結果であるが、それは違うと思う。コストが上昇している今の時期であれば、僕らにまかせるのであれば、全部をまかせてもらいたいと言っている。誰が説得してもこれは変わらない。自分で考えるポジションに置かれていなければ、コストも調整できない。

迷惑をかけられたくないとか、そういうことではない。舞台機構のネジ一つまで自分で考える。新潟でやっているものも、舞台機構設備業者が途中で代わり、悪いものをつくったところがある。誰も発見できなかった。僕が行って見て、やはりここが違うと思ったら、その通りであった。今、全て壊して取り替えさせている。そういうことが、自分で引き受けて責任を持ってやるということではないのか。中途半端にしないでくれ。自分で決めた事でもないことに関して文句を言われるのは嫌だ。

この方式については、僕のコンサルである永田音響設計も疑問を持っていて、やらない、と言っている。それではバンザイするしかない。だから言っている。自分のやり方にそぐわないやり方でやるのは止めて欲しい。

勝又副分科会長

今後協議していくということとしたい。この委員会は、これを議論する場ではない。市も含めて、きちんと調整していただきたい。先ほど言った、コストが厳しい時期であることも含めて、考えていく必要がある。

一通り、ページをめくることが出来た。258 の意見、一つ一つに答えて行かなくてはいけないが、それは今後の作業となる。

少し前に戻るが、桧森委員に芸術文化創造センターと市民ホール、名称が変わったことについて、パブリックコメントでもご意見が寄せられている。桧森委員にはいつも社会文化機関としての芸術文化創造センターについてお話しをいただいております、そのあたりをもう一度整理してお話しただけでないか。

桧森委員

何回も言っているが、せつかくこういう施設をつくる以上は、より積極的な役割を果たす施設になってほしいという想いがある。名称はどちらでもよいが、少なくとも、がらんどうのハコではない。必ずソフトの機能が入っており、ソフトの機能を果たすためのスタッフがいる。例えば市民が借りる時にも、よりよい創造、よりよい表現ができるようにアドバイスしていくという機能もある。芸術文化は、それ自体が誰かの趣味や癒しとなる側面があるが、社会的な課題の解決という面でもおおきな役割を果たすことができる。例えば可見市で言えば、多文化共生が課題となっており、それを解決するために芸術文化で何ができるかを考え、積極的にプロデュースしている。施設をつかって積極的に何かを行なっていくという意味で、芸術文化創造センターという名称となっている。

勝又副分科会長

全体を通じて、何かお話ししていきたいことや、気になることはあるか。

市来委員

今の桧森委員のお話にも通じるが、なぜ事務室にこんなにデスクが多いのか、というコメントがある。最初に管理運営計画の現在の案を説明していただいた。この想定される自主事業を行なうのには、ある一定程度の人数が必要である。私の経験から言うと、開館当初にランニングする時期、中長期の展開で言えば「初期」というところまでに、結構な人がかかる。そこから後は、催しをやった人達自身が次の世代を育てていく、という流れになり、変化が起きていく。市民の皆さんもご心配していらっしゃるようだが、こういった施設で新たな事業をやる時に、当初は、ある程度の人と予算がかかる。おそらく、5年たつと、力点を持つ方向や、サポートすべき箇所が見えてくる。そこまでは人手がかかる。5年後には、管理事務室も多目的に使われてくることになるかもしれない。26人がずっといるわけではない。その辺も見越して、防災センターをここに入れているのはとても良い。5年後は防災の機能も非常に充実していることも考えられる。フレキシブルに考えられる。会議室スペースが事務室の中に設けられて、現在の会議室がアーティストラウンジみたいな方向に固定化していくこともありうる。今後、運営して

いく中で見えていくことだと思う。そののびしろがある状態であるのはいいことだと思う。皆さんが心配している人数のことについては、当初はある程度かかる、ということを上上げる。

桧森委員

あまり言いたくはないが、もし指定管理者による運営になる場合、25人のうち、例えば企画プロデュースをするスタッフや、市民活動サポートのスタッフは、1年契約の契約社員となることが考えられる。昇給もほとんどない。5年たつて指定期間が過ぎて、もしも、他の組織になると、次の組織が継続雇用しなければそこで終わりになる。文化施設におけるスタッフは、そういう雇用形態であるのが全国的な現実である。

市来委員

昨日か一昨日のニュースで非常勤の雇い止めが10年まで、という話もあった。そうなると市が雇いやすくなる。全体の人件費枠のどこが有効か。事業として委託する方法もある。雇用形態については、あまり固定的に考えないで、フレキシブルな部分でよいのではないか。1年契約とも限らないし、指定管理者でもいろんなパターンがある。

桧森委員

それは、その通りである。私が言いたかったのは、市役所の職員が25人いて、この人達が定年までずっと昇給していくという組織形態ではないということだ。

勝又副分科会長

管理運営分科会のようになってきた。建築の計画と管理運営はそれほど離れるものではなく、一体的なものであることがよくわかる。

終わりの時間となっているが、よろしいか。ご意見がなければ、今日頂いたご意見については、事務局で整理して頂き、今後開催される市民ワーキングや専門分科会の概要も含めて報告していく。また、委員の皆さんで、今日の検討内容や、パブリックコメントについてご意見があれば、事務局に出して頂きたい。ご意見はないか。事務局からもないか。

次第3 閉会

勝又副分科会長

それでは、本日の議事については全て終了した。これにて会議を終了する。皆さまお疲れさまでした。

全委員

ありがとうございました。

以上